

御手洗姓氏についての考察

御手洗 一 而

(会員・川越市小堤)

はじめに

御手洗姓氏あるいは一族については、全国の同姓を調査して、「御手洗姓氏考」として一冊の本にまとめたいと思っているが、その出自は、未だに不詳の氏族もあり、豊後に限っても、後述する瀬戸内の大崎下島（御手洗島）から、京の藤原氏や関東の藤原氏支流までさか上り、広範囲の調査を余儀なくされるため、まだ解明に至っていない。その間、豊後に流転後の一族については、現在までの研究を基調にして『巴の鏡』として物語に出版したが、当初から参考資料の明示を希望する者が多かった。当然のことながら判明部分の調査結果だけでも発表すべきであったが、豊後以前の歴史については、何分にも未解決の部分が多く、その上『佐伯史談』の枠外をおそれ

て言及をさけていた。

ところが、近年事務局（清田先生）への問い合わせも多く、その発端の責任を感じ、あえて研究途上のまま、現在までの調査研究の結果を小論にまとめてこの場をお借りすることにした。たゞし、その研究対象は、余りにも広域と長い年代に及ぶため、本稿はその大要のみを記し、佐伯地方の同姓を主眼とし、つとめて引用文をさけて出典を明示することにする。

語源と同姓の分布について

「御手洗」は読んで字の如く、御は敬意を表わし、手を洗うことであるが、古くは「みたらし」と読ませている。源氏物語に始まる種々の古典でも、「御手洗」と「みたらし」を併用しているから、当時は「みたらし」と

呼んだものであろう。そして、神を拝する前に手を洗い清めるための水であり、あるいは拝殿前の小川を総称して「みたらし」「御手洗川」といったが、年代が下って次第に普通名詞として使われている。伊勢大神宮の御手洗川や京都賀茂神社の御手洗川は著名であるが、全国一宮社前を流れる小川にも多くこの名があり、『義経記』巻第七には羽黒権現の御手洗川もある。

又一方では、高貴の方が弓矢や杖で湧水を掘り当て、御手洗の地名や沼名となる伝説や伝承の類は、全国いたるところにある。近くでは三重町の御手洗神社が縁起から知られ、大分市宇松岡の御手洗神社は、同社の豊岡繁宮司によれば、奥の岩から年中清水が湧き出て絶えることがなかったため、御手洗が当地の字名となったと聞いている。

佐伯地方の御手洗一族が住居していた、瀬戸内の現在の広島県豊田郡大崎下島もこの類である。同島は、後述する如く、中世期は伊予国越智郡の大三島神領であり、徳川時代は御手洗島と呼ばれていたが、^{註1}同島の東端には現在でも御手洗の字名が現存し、その起源については、景行天皇と菅原道真の水源を掘り当てた二通りの伝承が

残されている。

何れにしても、御手洗の語源は、あくまでも禊から起り、概して神事に関係する呼称となっているが、こゝで注意しなければならぬことがある。それは、御手洗が神事に関する余り、同名の御手洗神社の縁起につながる可能性があるが、この神社と御手洗一族の族神とは必ずしも結びつかないことである。更に、同姓(名字)の中には、古事記や日本書紀の類から、「みたらし」の同訓を探し、御手洗の名字は古代からあったと説く人もいるが、御手洗の語源と名字になる根拠を混同してはならない。

現在では、「みたらし」が「御手洗^{てあらし}ひ」から「みたらし」と訛って使われる場合が多いが、山口県地方では、語源通り「みたらし」と読ませる一族もある。佐伯地方の同姓ももとは「みたらし」であったかもしれない。

次に同姓の分布であるが、現在は子孫が繁栄し、北は北海道まで在住者がみえるが、元来は関東以西であり、近畿以東では、山梨県の同姓が著名で、東京都下秋川市、静岡県にも分布する。これらを別にすれば、和歌山県の

本ノ本海岸から五島列島に至るまで、対馬を含めて同姓の分布は、四国・中国・九州のすべて瀬戸内海を通じる海岸線に散在している。詳細は省くが、必要箇所はその都度後述する。

「巴の鏡」出版までの史料

現今、家系や氏族の研究が大へん盛んで種々の解説書も見られるが、その基本になる研究書では、太田亮氏の『姓氏家系大辞典』におうところが大きい。たゞし同書によっても、御手洗の項には、地名として駿河・常陸・美濃・周防・伊予等をあげ、甲斐東八代郡の藤原姓御手洗新七郎正重と筑前の御手洗五郎三郎を付記しているだけである。

この正重については、明らかに『寛政重修諸家譜』から引用しているが、私の二度の山梨県探訪では、その系の所在を確認出来ず、古老の一人からは、甲斐一宮神社の御手洗川から由来する名字ではないかと聞いたが、同書の「断家譜」には、正重の孫にあたる二男の正久系が絶家し、その肩書に、「本国筑前・家紋酸漿」とあり、筑前御手洗氏との関係がうかがわれる。ただし、この筑

前御手洗氏は前記の御手洗五郎三郎系ではなく、同系は豊後より進出した佐伯地方の一族で後述する。そして、筑前御手洗氏について、福岡県粕屋郡志免町には現在でも字名として御手洗の地名が残っているが、同姓の子孫は、二十数戸かたまって須恵町植木地区に繁栄している。私は今夏これらの有志と一夜座談会をもったが、その出自に関して、手掛りになるものは得られなかった。

では、甲斐と筑前との同姓の關係はどうなっているのだろうか。こゝに参考にすべき資料が残されている。それは、現在対馬の同姓一族に残されている、のちに同島の藩主となる宗氏からの島割の宛行状である。その中に、永享二年、宗貞盛が筑前国山門庄内の名田を御手洗又三郎にあてがった宛行状がある。この一族は、間もなく中国の大内勢の侵攻に敗れて所領を失い、宗氏と行動を共にして対馬に渡ったと思われるが、この時代、筑前にかんがりの勢力がうかがわれる。前記した須恵町の一族が現在対馬に現存する同姓と同族であるか確証はないが一つの参考にはなる。又一方、この頃から大友氏の筑前進出が始まり、さきの御手洗五郎三郎系とも思われる、八女地方の巴紋を使用する同姓の定着もあるが、逆に筑

前御手洗氏の豊後入りについては、現在まで確証がつかめないでいる。

ところで、甲斐の同姓一族の指摘する「本国筑前」とは、筑前のどの本貫地、どの一族をさすのであろうか。前記の御手洗新七郎正重の系譜は、武田信玄の父信虎に仕え、系図は突如としてそこからの書き出しになっているが、戦国時代に、甲斐国と筑前国との関係がどうしても理解出来ないでいる。この正重の系図は、徳川期になって、身分登録のため上申したものであるが、当時、黒田藩に仕えた筑前の御手洗一族も聞かず、今後の研究課題として残される。たゞし、私見では次の考え方も捨て切れないでいる。

鎌倉時代に、甲斐の武田氏は、守護職として安芸国へ入った。そして、武田法師系図^註では、信武の曾孫信賢の項に、「安芸守護。蒙武家勸氣。出安芸国赴予州。再帰甲州」とあり、以後、子供の中には伊予に住んで河野大名に従った者がいる。同じ頃、大崎下島には後述する御手洗一族が進出していた。そして同じく河野大名に従属

する経過をみると、甲斐の同姓は、筑前の同姓との関係よりも、御手洗島を介して、豊後に逃れた同姓との関係の方が、より近く自然だとうけとめている。

うがった考え方をすれば、筑前の御手洗も伝承に残る五島列島の同姓と同じく、御手洗島からの進出組かもしれない。たゞし、豊後の同姓は、大友氏の改易や佐伯氏の除国にあって、夫々離散か帰農の運命を辿っている。戦国期を生きぬいた甲斐の同姓一族は、すでに本国伊予ではなく、豊後と筑前に迷ったかもしれない。

以上は仮説であるが、この筑前の御手洗氏は藤原南家武智麻呂から出た崇徳院藏人高信の後裔という一説もある。たゞし、同じ藤原氏といっても、宗氏が大宰府の惟宗氏の出であるように、大宰府に下った藤原氏か、あるいは、当時海浜に近い宮崎宮の神人が同地の御手洗の地名を冠したか、大崎下島に渡った藤原氏か、家紋や年代考証と合わせて今後の調査を待たねばならない。

私が佐伯地方の氏祖である、若狭守信秀を物語りにして発表するまで、御手洗に関係する史・資料は、以上の他にみるべきものは全くなかった。現在の解説書でも、大

分県の特徴のある名字として、一番先に御手洗姓をあげ
るが、その内容に言及したものが無い。私の調査でも、
同姓は全国的にみて大分県が一番多いが、内容に立ち入
ったものがないのは、史料不足のためもあるが、前述し
た如く、豊後の同姓が、近世を境にことごとく庄屋職に
身を退いたため、一切の資料が表に出なかったためであ
る。『巴の鏡』を出版以来、若狭守信秀以後の清原系図
の写しをもつ同姓からの申し出が、全国各地から寄せら
れた。これらは一様に佐伯地方の同族であるが、次はこ
の一般に流布される系図から論を進めたい。

一般に流布される清原系図

先ず豊後に関係する書き出し部分を記す。

御手洗氏系図

紋三頭左巴

人皇四十代天武天皇

清原朝臣

人皇六十八代後一條院御宇治安二壬戌歲

御手洗若狭守信秀世々相嗣

御手洗若狭守信秀

此間五百余年世々相嗣

末孫玄蕃 信恭

佐伯竹之浦住居 妻二神氏 仕于佐伯

城主薩摩守惟治公 兼為佐伯浦方代官

嫡男玄蕃 定信

妻野々下氏 人王百六代後奈良院御宇

大永七丁亥年十一月廿五日 戰場死

世寿三十三歲

嫡男玄蕃 信好

人王百八代後陽成院御宇 慶長年中

仕于毛利伊勢守高政公 元和二丙辰年

六月十二日化去 法号 花王宗春居士

妻城下大崎孫左衛門信行女 法号 春

岳妙意大姉

二男左京 信知

嫡男左京信房 世々相嗣至于今同所

末氏三郎兵衛

三男監物 信武

弱冠名源大夫 蒲江浦住居 法号

真岳宗金上座 妻法号観月妙照大姉

嫡男太郎七 信久

妻日州延岡渡辺金三郎女

二男源之丞 信家

日州 細島住居

系図は、治安二年（一〇二二）の書き出しからなり、

その前文に「大伴家略実記並埴氏改御手洗證記」という漢文体の五百字からなる一文をそえてある系図もある。

これらの系図は、大崎下島から一族が豊後に移転した、南海部郡竹野浦、蒲江町、日向市細島の流転先から一般に流布されたものである。内容の考察は後段に譲るとして、注目すべき点が二つある。

(一) 系図整理作製の時期

先ず前文の「大伴略実記」であるが、この実記は、内容を問うまでもなく、御手洗姓を大和朝の時代に位置づけるための紛飾である。天武天皇の皇子舎人親王を出自とする清原氏の系譜と大伴氏の系譜が別系統であることは明白であるため省くが、これだけの系譜を作るにはか

なりの史書を必要とする。その時期について、竹野浦の「実記」には、宝暦四年四月上旬とある。おそらくこの時期に、現在流布の系図も整理作製されたと思われるが、この宝暦年間は、佐伯毛利藩の藩学隆盛の時期と一致している。四教堂の史籍を参考にして苦労したものと思われるが、整理する以上、元の系図がなければならぬ。本系図については後述する。

(二) 大友家臣団にみる清原流御手洗

佐伯氏は近世以前に国を離れたため、佐伯氏家中の名簿など佐伯地方に残されていないが、佐伯氏が仕えた大友氏には、家臣団の中に御手洗の名がある。「豊陽志」ほか諸本には、同紋衆、大友一族、緒方一族、諸氏による分類をしているが、こゝでは各出自別に分類した「大友氏部下姓氏付」を引用する。これは速見郡の志手文書として、『大分県史料十一』に所載のものである。その清原氏の項に、帆足、森氏などの豊後清原氏に交じって大佐井、御手洗、田奈具たなぐの各氏があるが、奥付からして天正十一年小春廿三日の作製時期が知られる。この「部下」について、『大友宗麟』を著した外山幹夫氏は、大

友氏の「部下」、或いは「家臣」と称するものは、大体大友氏の支配本国である豊後領主であって、これ以外の征服地の領主は殆んど含まれていないと記している。私も独立した一軍団を動かせる領主とみる立場から、佐伯氏に仕えた佐伯地方の御手洗一族はこの範疇はんちゆうに入らないと思う。そして、この御手洗氏は、現在でも大野川流域に繁栄する一族であると考えている。

そしてその理由として、田奈具氏は種具氏であろうと思われるが、この種具氏は御手洗氏より派出の一族註5であり、大佐井・御手洗・田奈具は、明らかに大野川流域に位置している。大野川河口の三佐地区に本貫地をもった一族に間違いあるまい。

大分県下の同姓には大きくこの二つの流れがあるが、豊後における文献上の初見は、永享八年姫嶽の合戦に参集した八名の武将名がある。註6当時瀬戸内から流転した海部の御手洗にそれだけの力はなく、この参集組の兵力は、「大友氏部下姓氏付」として考察の対象になる勢力を裏付けている。

大野川流域のこの御手洗氏について、「臼杵石仏」を書かれた大久保貫之氏は、「臼杵史談七〇」号に、同姓

の起源について故御手洗辰雄氏の意見を書いている。それによると、氏は大友一族説と御手洗島説をあげ、後者を有力視されている。そして詳細の系図のことも書いてあるが、まだ未確認のまゝになっている。その他、同族の中には水軍出身の伝承を伝える人が多い。

何れにしても、天正年間清原氏の出自を名のるこの一族と、現在でも清原系図をもつ佐伯地方の同姓は、同族である可能性が非常に強い。私見では、この大野川流域の同姓一族は、大友氏の水軍整備に勧誘されたか、後述する南朝宮方と四国大名河野氏の関係から豊後に渡ったか、前記の姫嶽合戦の時期を下限にして今後の研究課題である。それにはどうしても大崎下島の歴史にさか上らねばならない。

本系図について

一族と伊予との関係を考えるには、先ず関係するその資料から書かねばならない。清原系図が宝暦年間に整理されたことは前述したが、その時の整理の対象になるのが治安二年から書きつがれた元の系図である。私は竹野浦に現存するこの系図を「御手洗本系図」と呼称して区

別しているが、この系図も、書体からして、徳川時代の同時期かあるいはそれ以後に整理したとみられる。

系図は横書で継紙に書き列ねられているが、治安二年から信秀が豊後に流転する広永二十年代まで、約四百年間に三十数代に及ぶ歴代が無造作にくつつけられている。三十数代とは優に千年を数える年数である。ところが、系図は半ば頃から、「藤」の字を交じえる明らかに藤原系図と思われる系譜に変わってくる。そこで、以後の論述の便宜上、ここでは私が各歴代に番号を付し、二流に區別したものを直系のみ示すことにする。両流とも兄弟にいたるまで詳細に書かれている。

逝去

①五位上康和四年四月七日
清原朝臣昌秀——昌綱——昌重——肥前房——光則
②右工門尉——刑部左衛門尉——光則——成則——光長氏
③豊後守五位上
④出雲守五位上
⑤左衛門尉
⑥光綱——光定——光氏——光秀——光成
⑦光清

①藤斬太夫義則——義幸——十印房幸源——有宗
②藤八郎大夫
③承久元逝六十六
④額櫛近

祖藤次良大夫 ⑤藤次良大夫 ⑥ ⑦櫛辺民部大夫
宗吉——宗兼——兼則

⑧櫛辺四良大夫 ⑨丹後法皇太皇太后 ⑩櫛辺九良 ⑪
兼重——兼成——兼成——筑後房善信——

⑫櫛辺十良 ⑬左工門尉 ⑭ ⑮伊智守 ⑯石見守
兼基——清氏——則重——氏元——長氏——

⑰氏忠——⑱若狹守
信秀

(以下略)

前の系図は清原朝臣から続く清原系図であるが、藤原大夫からの系図は明らかに藤原系図である。そして、清原本系図の初代昌秀の没年が康和四年(一一〇二)と、藤原本系図の三代十印房幸源の承久元年(一一一九)六十六歳没年とを照合すると、両系図はほぼ同年代からの書き出しになっている。ちなみに治安二年とは藤原道長の時代であるが、つまり、両流の系図が一本につながれていたわけである。これらは養子縁組などにより二つの系図が現存すると思われる、粉飾部分や不審な点もあるが、個人の家に残存する資料としては稀有なものである。そのため両系図の信憑性について考察する必要があるが、紙数の都合上、次項では時代を追って要点のみ考証することにする。

註

- 1 御手洗港の歴史・広島県豊田郡豊町刊
- 2 長崎県史 史料編第一 三根郷御代々御判物写
- 3 統群書類従 群書類図部集 第三
- 4 御手洗玄一郎・御手洗信夫・御手洗栄三郎各氏蔵
- 5 増補訂正 編年大友史料 田北学編十八
- 6 大分県史料(26) 第四部諸家文書補遺 (一) 柳川大友文書

梅木幸吉氏の新著

佐伯文庫の蔵書目

A 5 三六〇頁

さきに「佐伯文庫の研究」「佐伯文庫の残存本」の二著を刊行した著者の三部作の仕上げ。
相違ある各種の佐伯文庫蔵書目録を校合勘案して分類、散乱する書籍の行き先を調べあげ、古い蔵書目録の面影を少しでも残そうと、活字によらず、すべて毛筆墨書により、写真印刷にした著者の労は大変なものである。三部作完成、心からおめでどうを申し上げます。(定価は著者に照会されたい)

萬葉 第四号

弥生町歴史と文化を語る会々誌

第四号ができた。会誌を度々発行することは、会員の団結、会の生々発展につながる。小冊子ながら会誌を度々発行する歴史と文化を語る会に深い敬意を表したい。

最初に「切畑革農更生会の思い出」として工藤豊前町長の一文がある。戦時下青年の脈々と流れる熱い血潮、開墾に、栽培法の研究に取り組み真しな姿に感激する。会長古藤田氏の研修余録(三)は「深島に流入のあとをたずねて」で、常に現地研修にとりくむ同会の姿をみる。五十川千代見氏の「切畑の水車」は短文ながら、地道な尊い研究、かつては田舎の風物詩であった水車、もう姿を消してしまった。

いつも健筆をふるわれる中村由子氏の「庚申様」、川野哲氏の古い写真、短歌の盛んな弥生町の第一人者矢野文雄氏の「短歌歳時記」染矢春子氏の「義民李右衛門」の短歌等、多士濟々である。御発展を祈る。(塩月)